南小倉バプテスト教会で「多様性」を考える

宮崎千恵

イエスが一緒に生きたのは、社会の最底辺で苦しみながら、なんとかその日を生きのびていた人たちでした。イエスに倣う教会は誰に寄り添って、一緒に歩んでいるのか、歩みたいのか、いつも問われます。常に多様性を受け入れる体制と心構え（だれでもどんなひとでも）と時に応じた柔軟さが求められます。

◇いやおうなく変わってきた南小倉教会：「みんな」救われていると宣言したばかりに

教会ができてから 50 年以上たった 2017 年、数年かかって教会の在り方の「おおもと」である「信仰宣言」のリニューアルが完成しました。南小倉教会は何を大切にしてどんな教会であろうとしているか、を表す宣言です。かっちりとした文章の「前文・宣言」と、互いに読み交わすことができる「交読文」の形を作り、毎週礼拝で「交読文」を少しずつ読んでいます。

その中で、「南小倉教会はみんなの教会をめざす」「人はだれもが救われている」という宣言をしました。それまでも、月に一度の主の晩餐式はクリスチャンであろうとなかろうと「どなたもパンと葡萄酒をお取りください」とご案内して、みんなでわかちあっていました。信仰告白ができたあと、「召天者記念礼拝」も、教会員の家族や歴代教会員に限らず、だれでも、もう亡くなってしまった自分の大切な人の写真や思い出を持ち寄って語る日に変わりました。いろんな方の参加があり、一人一人の思い出を聴き、一緒に静かに祈る大切なひとときとなっています。

また、網のサポーターによる教会財政の支援制度を導入したことにより、多くの方が教会の働きを支えて下さるようになりました。

◇LGBTQ は最近急にあらわれたのではない：そこにいるのに言えなかっただけ

2019 年に特別集会に東京より中村吉基先生をおまねきしてお話を聞きました。ゲイであることを公表して、講演や出版、絵本の翻訳や NPO 活動などをされている、現在は日本基督教団の代々木上原教会の牧師さんです。「みんなのつくえ」の見守りをしている虹色くまのヨッキーは中村先生の分身です。

たくさんのスライドや資料を準備して、やさしい語り口で説明してくださり、また礼拝で宣教をしてくださいました。研修会を含む 2 日間で、自分たちがいかに無自覚に性的少数者のことを知らずに、傷つけて差別していたかを知らされました。ちょうど、世の中は東京オリンピックで賛否両論にぎやかだった頃です。その国で開催するためには「オリンピック憲章」の順守が必至であり、根本原則の中の「性別、性的志向などによって差別されてはならない（簡略）」という条文のために、日本の大企業がこぞってジェンダー平等や性的少数者の権利を守るポーズを見せ始めたとお聞きしたのが印象的です。集会に参加した高校生が、感想で「こんなオリンピックでも一つくらいはいいことがあったのだなと思いました」と発言したのが面白かった。

その時につけた集会のタイトルが「教会に LGBT を迎えよう」でしたが、今考えると、実に無神経であったと反省しています。迎えるのではなく、もうすでにそこには、「いる」のです。教会でも職場でも学校でもどこでも、いないのではなく、言えないだけで、ずっといるのです。安心して話せる場所があれば、みんな、とても生きやすくなるはずです。残念なことに、自殺を考えたことがある LGBTQ の人は 66%、10 人中 7 人位だそうです。（竹内清文さん NPO レインボーハート okinawa）厚生労働省の無作為抽出による調査でも、性的マイノリティの「自死未遂」は同性愛者、両性愛者は非当事者の約 6 倍、トランスジェンダーは約 10 倍高いとのこと。

性別、性志向の違いやジェンダーの違いで垣根や制限を設けて傷つけるのではなく、どんなひとりひとりも安心して活躍できる世の中にしていくためにも南小倉教会はアライ（なかま、支援者）であり続けます。教会の HP では「結婚式、葬儀式承ります。同性婚の結婚式についても遠慮なくご相談ください」との一文を掲げました。これからも現在進行形で、学び、みんなで悲しんだり笑ったりして、できることはなんでもしながら、一緒に生きていきたいと願うものであります。

◇みんなのつくえ：「食べ物」が玄関を突破する力に

コロナ禍の中で突然、偶然始まった「贈り物」の連続。人はつながりたい、贈りたいのかもしれない。恩返しというよりは恩送りという考え方の実践の場。たくさんのパンが、たけのこ、玉ねぎへとつながって、今に至っています。

教会で「みんなのつくえから見えてきたもの」というタイトルで谷本牧師が報告会をしました。3 年間ずっとほそぼそ続いていて、提供品が日本中から送られてくる。この社会も捨てたものじゃないなと思えます。小さな希望です。講演の内容は you tube でご覧いただくことができます。すごく面白い。つくえのきっかけになった人たちや、つくえのおかげで実際につながった人たちも来られました。

そして今、やはりコロナ禍で中断してしまった「水ようごはん」の再開に向けた第一歩として、月に一度土曜日に「みんなのごはん」をぼちぼち始めています。少しずついろんな人がやってくるようになりました。近所の方や、遠くから来られた方が、あの敷居の高い教会の玄関を通り抜けて教会の中に入ってこられ、カレーを一緒に食べることが、ちょっとだけ定着しつつあります。たくさん話をされていく方もあり、黙って食べてすぐ帰る方もいます。もちろん教会員も来ます。テイクアウトの参加もあり、お手伝いをしてくださる方もいます。いい時間だな、と思います。

◇教会学校は学校ではなく「場所」：走り回りながら、聞いてないふりしながらも

コロナ禍で教会学校もお休みとなり、子どもたちに聖書のおはなしをする機会がなくなって 3 年が過ぎました。今年の５月にようやく再開した教会学校は、幼児１人と小学１年生２人とおとな３～４人が主に出席しています。年齢と性格と環境などにより、まず、椅子に黙って座って聞く、そもそも座り続けることが難しい。おいのりと「しゅわれをあいす」のさんびかとおはなしと献金というシンプルな 30 分のプログラムですが。

今はただ「ここにいていいよ」という場所に、一緒に体を動かして楽しいことしようよ、という時間になりました。それが精いっぱいです。創世記「さいしょの 7 日間」「ノアの箱舟」「4 人のともだち」「いなくなった羊」そして「ザアカイさんのはなし」を一緒に楽しんできました。再開して半年くらい経ちましたが、少しずつ「こういう時間なのか」という意識が芽生えているようです。走り回って、参加していないようでいて、話を覚えている、こいつ実は聞いているな、ということを時々感じることがあるのです。

◇こどもとおとなのみんなの礼拝：半年たってようやくノリがよくなってきた

教会学校だけでなく、こどもたちを中心にした「みんなの礼拝」を月に一度持つことが定着しつつあります。みんなで絵本の絵を見て、読み手の声でことばを聴く。その後に牧師さんのメッセージを、こどももおとなも一緒に聞く。牧師さんが問いかけて、自由に答える。おもしろいね、ほかには？するといろいろな声が上がる、何を言っても受け止めてもらえる、限りなく楽しくて自由なたのしい礼拝です。「風がふいたらどうなる？」には大人からも子どもからもたくさんの答えが返ってきました。

◇風の吹く先へ

今年始まった「現代神学読書会」も、ほぼ毎月続いています。ほんの数名で始まった会ですが、その本を読んでくることだけが条件で、質問、感想、意見などを交わします。すでに長く続いている月に二度（昼の部、夜の部）の聖書講座同様に、参加者も定着し、自由に熱心に語り合う時間です。次はジョン・ディア「山上の説教を生きる」山浦玄嗣「ナツェラットの男」が控えています。それぞれの活動や集会にはそれぞれ違ったメンバーが集まるのも面白いことです。すそ野を広げて、いろんな人が来やすいようにしています。

教会の掲示板では教会の姿勢を外に向かってアピールしています。戦争に反対し、いのちの大切さを訴えるために、いろんな方法を考えて実践する、手作業の小さな小さな抗議です。LGBTQ のアライ（味方）であることを示すちっちゃな虹の旗もあります。

多様性を受け入れる＝わからない相手を受け入れるのは難しいですね。わかったつもりで歩み寄るのではなく、人を簡単には理解できないのだということを忘れないで、敬意という距離感を持って接することが必要かと思います。

教会にもわたしたち一人ひとりにも風は吹いています。聖霊の風に促されて、みんなで一歩前に。いろんな違いで、人と人の間に垣根や制限を設けて傷つけるのではなく、どんなひとりひとりも安心して活躍できる世の中にしていくために、風の吹く先に向かって歩いていきたいと願っています。